地　理　歴　史

世界史Ａ，世界史Ｂ

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

世　界　史　Ａ

１　前　　文

共通テスト⑴における本年度の「世界史Ａ」の受験者数は1,544名と，昨年度の1,765名から221名減少したが，科目選択率は昨年度と変わらず0.4％となっている。共通テスト⑴の平均点は46.14点で，「世界史Ｂ」の平均点63.49点とは17.35点の差があり，大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）時と変わらず，両者の平均点には開きがある。

以下，問題についての細部にわたる検討は，次の観点で行っている。

- 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に準拠し，「科目」の目標に適合しているか。
- 教科書の内容に即し，それを逸脱しない出題であるか。
- 世界史の基本的事項の理解と歴史的思考力を評価する適切な問題であるか。
- 問題数・配点や出題の地域別・分野別・時代別のバランスは適切か。
- 問題の難易度・形式・表現などが適切であるか。

２　内　容・範　囲

（1）評価の観点

年度・出題数 設問形式	令和３年度 出題数	（　出題率　）
主に知識・技能を評価するもの	24	（ 72.7 ％ ）
主に思考・判断を評価するもの	9	（ 27.3 ％ ）
合　　計	33	（ 100.0 ％ ）

（2）分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	令和３年度 出題数	（ 出題率 ）
政治史	27	（ 81.8 ％ ）
社会経済史	2	（ 6.1 ％ ）
文化史	2	（ 6.1 ％ ）
複数分野に関わる	2	（ 6.1 ％ ）
合　　計	33	（ 100.0 ％ ）

＊知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は、評価・分析委員会の判断による

（3）時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	令和３年度 出題数	（　出題率　）
古代史	1	（ 3.0 ％ ）
中世史	2	（ 6.1 ％ ）
近世史	4	（ 12.1 ％ ）
近代史	6	（ 18.2 ％ ）
現代史	16	（ 48.5 ％ ）
［うち戦後史］	7	（ 21.2 ％ ）
複数時代混合	4	（ 12.1 ％ ）
合　　計	33	（ 100.0 ％ ）

（4）地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	令和３年度 出題数	（　出題率　）
西欧・北米	9	（ 27.3 ％ ）
東欧・ロシア	5	（ 15.2 ％ ）
東・内陸アジア	8	（ 24.2 ％ ）
南・東南アジア	5	（ 15.2 ％ ）
西アジア・アフリカ	1	（ 3.0 ％ ）
中南米・オセアニア	3	（ 9.1 ％ ）
複数地域に関わる	2	（ 6.1 ％ ）
合　　計	33	（ 100.0 ％ ）

中世（5c～14c）・近世（15c～17c）・近代（18c～19c）・現代（20c～）を判断の目安とする。

第１問　国際関係や国際貿易

問１　ナポレオンやヒトラーが行った外交・対外政策について，適当な文を選択する問題。単純な知識の有無を問う従来型の問題である。

問２　文中下線部で念頭に置かれている戦争について，適当な文を選択する問題。下線部を含めたリード文の文脈から歴史事象を考える，思考を評価する良問である。

問３　リード文で書かれた分析に関連するアメリカ合衆国の政策について，適当な文を選択する問題。リード文の読み解きから歴史事象を考える，思考を評価する問題であるが，資料の発刊年が記載されていることから，年号の知識でも解答を選択できてしまう。

問４　グラフから読み取れる事柄について，正誤の組合せを選択する問題。グラフが生かされておらず，年号の知識だけで解答をする問題である。グラフの活用において改善が求められる。

問５　世界市場の輸出入や貿易・交易について，誤った文を選択する問題。単純な知識の有無を問う問題である。

問６　文中の空欄に入る国名とグラフから読み取れる事柄について，正しい組合せを選択する問題。グラフの読み取りから該当する国を思考する問題であるが，十分にグラフを活用できているとは言い難い。グラフの変化から傾向やその理由を考察させるなど，出題に際して工夫が必要である。

第２問　世界史の映画や絵画

問１　会話文中の空欄に入れる人名と文について，正しい組合せを選択する問題。空欄直後のキーワードから正答を選択できる，知識の問題である。

問２　文中下線部の要因について，誤った文を選択する問題。知識の有無を問う問題であり，受験者は容易に解答出来たと思われる。

問３　文中下線部の要因について，正しい文を選択する問題。知識の有無を問う問題であり，プラハの春の年号を覚えていなければならないため，やや難しい。問題の出題の仕方に工夫が見られるが，問題文の表現にはもう少し慎重な精査が必要と思われる。判断の根拠を問うなど，出題形式を工夫することで，思考を問う良問となりうる。

問４　文中の空欄の出来事の成立過程について，適当な文を選択する問題。選択肢の表現を抽象化した点で工夫が見られるが，第二共和政の知識のみで正答に至り，絵画を活用する場面がない。

問５　文中の空欄に入る人物名と文について，正しい組合せを選択する問題。会話文中のキーワードから正答を選択できる問題であり，問題文こそ「絵画２の説明」となっているが，単純な知識問題となっている。

問６　文中下線部と同じタイプの歴史的出来事について，適当な文を選択する問題。類型化の意図が見られるが，選択肢に正しい文が正答一つしかないため，知識による正誤判定問題となっている。

第３問　世界史上の君主

問１　文中下線部の同盟結成に介入した国の皇帝と同盟の名称について，正しい組合せを選択する問題。資料から読み取った情報から歴史的事項を思考する問題で，やや解答が難しい。

問２　文中下線部の帝国の歴史について，正しい文を選択する問題。問１で資料の歴史的事象が読み取れれば，連動して単純な知識問題となる。

問３　文中の空欄の国で起こった出来事について，正しい文を選択する問題。問２と同様。

問４　十字軍について述べた二つの文の正誤について，正しい組合せを選択する問題。単純な知識の有無を問う問題である。

問５　文中の空欄に入れる語句について，適当なものを選択する問題。空欄の直後で年代及び歴史的事象が明記されており，知識を問う問題である。

問６　文中下線部について，正しい文を選択する問題。下線部中にキーワードが明記されており，

知識により正答へ至る問題である。

問７　文中下線部の背景と政策が実現しなかった事情について，正しい組合せを選択する問題。背景は知識で正答を選択できるが，事情については科挙や宋代の政治体制の性質を基に思考することで正答に至る。知識と思考の組合せ問題である。

問８　日本と外国との交渉や交流に関する事柄と資料について，年代の古い順から正しく配列されているものを選択する問題。歴史的事象相互の関連がないため，年号の知識で正答を選択する問題となっている。

問９　仏教について，誤った文を選択する問題。知識を問う問題であり，資料や中問のテーマとの関連性がない。

第４問　世界史上の出来事の記録

問１　３つの資料について，年代の古い順から正しく配列されているものを選択する問題。読み取った情報を歴史の流れの中に位置付ける思考の問題であり，良問である。

問２　資料で示されたオーストラリアの外交方針について，適当な文を選択する問題。資料を読み解き知識で解答する問題である。知識を問う良問であるが，やや解答が難しい。

問３　文中の２つの空欄に入る人名について，正しい組合せを選択する問題。知識の有無を問う従来型の問題である。

問４　３つの資料について，年代の古い順から正しく配列されているものを選択する問題。資料を読み取り歴史の推移を考察する思考の問題であり，解答はやや難しい。年号や日付の知識で解答することも出来るため，資料をどう提示するかは工夫が必要である。

問５　世界の各地で起こった独立運動について，誤った文を選択する問題。知識で文章の正誤を判別する問題であり，出題に工夫が必要である。

問６　漢城の位置について，正しい記号を選択する問題。知識の有無を問う問題である。

第５問　民族間の対立関係や民族独立の運動

問１　文中の空欄について，適当な文を選択する問題。明の歴史の知識の有無を問う問題である。

問２　中国王朝と周辺民族の歴史について，正しい文を選択する問題。知識の有無を問う問題であり，資料との関係が薄い。

問３　文中の空欄に入る地名とそこで起こった事件について，正しい組合せを選択する問題。清華大学の注釈のみで解答できる知識問題であり，資料が活用できていない。

問４　ガンディーとハッタが植民地支配に反対している理由や背景について，正しい文を選択する問題。資料の読み取りで得られた情報を基に思考して正答に至る問題であるが，正答以外の選択肢が明らかに誤りであり，知識による消去法でも正答を導けてしまう。

問５　独立運動に対する考え方と独立をめぐる出来事について，正しい組合せを選択する問題。資料の読み解きで得られた情報を抽象化する，思考のプロセスを問う問題である。

問６　第二次世界大戦中日本に軍事占領された前後の時期の東南アジアについて，正しい文を選択する問題。知識の有無を問う問題である。

３　分　量・程　度

リード文や資料，中問の中心となる資料，小問毎の追加資料がふんだんに配置されていた。解答に至るまでに資料の読解や思考を求める問題が多く見られ，分量としては適切であった。

難易度は標準的であり，大学入学希望者の学力を評価する問題として適切と考える。２は，資料から読み取った情報を歴史の文脈の中に位置付けることを求めており，思考を評価する良問と言える。22も同様に受験者にとってなじみ深いとは言えないオーストラリアの歴史に対し，読み取

った情報を文脈化し，事象間の関連に気を配りながら時代整序を行わせる，思考を問う良問である。23 は同様にオーストラリアの問題であるが，資料から読み取った情報と歴史の知識を結び合わせることで正解に至る，知識を問う良問であった。また，12 は歴史事象の抽象化を促そうという意図は感じられるが，選択肢の質により知識問題となってしまっている点が残念であった。選択肢まで含めた出題の工夫に期待したい。13 ～ 15 については，13 で資料の歴史的事象が読み解ければ，以下の問題が連動して，単純な知識で解答できる問題構成となっている。大問や中問を統一したテーマや一つの資料でつないで出題することは評価するが，１つの解答が以後の解答と連動することは望ましくないので，出題の工夫をお願いしたい。

４　表　現・形　式

第２問はＡで生徒と先生との会話，Ｂで展示会での会話をテーマとしており，生徒の学びや思考の場面が想定されて出題されていた。それ以外の問題でも，リードとして資料を題材とした問題が多く見られ（第１問Ａ，第３問ＡおよびＣ，第４問，第５問），大多数の小問が資料の読み解きを前提として出題されていることから，一貫性のある出題がなされており出題の形式として大変良かった。

一方で，写真や絵画を掲載してはいるが解答の際には利用しない問題（第２問Ｂ，第３問Ｂ）や，グラフや地図を使用してはいるが解答には用いられなかったり，読み取った事項への考察を求めない問題（第１問Ｂのグラフ２）も見られた。また，27 は地図こそ用いてはいるが，都市の場所を選択する単純知識問題となっている。これらの事象は，受験者や現場の高校教員に対し，資料軽視につながる間違ったメッセージを送りかねない。文字資料以外の資料の活用について，一段の工夫をお願いしたい。

今年度の大学入学共通テスト（以下，「共通テスト」という。）では，知識そのものではなく用語解釈や歴史時的事象の背景を視野に入れた出題が目立った。この方向性は是非とも継続して欲しいが，９ のような問題の表現だと，根拠が不確かではないか，との指摘を受ける可能性がある。歴史的事象を根拠として推察するという問題の在り方は大いに評価できるので，出題の際の文章表現において，一層の慎重さを期待したい。

５　ま　　と　　め（総括的な評価）

本年度の「世界史Ａ」は，「学習指導要領」における「世界史Ａ」の目標に照らし合わせて，地域や時代等のコンテンツ，問題の難易度，出題の形式といった面から適切な問題であった。特に，大問単位で設定された共通テーマ，中問単位で設定された資料や会話文，リード文に関連した問題を出題したことで，近年センター試験で指摘されてきた，リード文と個々の小問の関係性の欠如から単純な知識問題になる，という問題点を一定程度解消出来た点で評価に値する。

一方で，共通テストの実施方針に掲げられた，「知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ，思考力・判断力・表現力を中心に評価を行うものとする」という基本方針に対しては，改善の余地を残した。外部評価分科会では，各設問を「知識・技能」「思考・判断」の２つに分類し，「思考・判断」を評価する問題の割合を算出しようと試みたが，何をもって「思考・判断」とするのかにおいて議論が紛糾した。そこで，外部評価分科会では今年度は暫定的に「読み取った情報や知識を活用して思考する」問題を「思考・判断」，それ以外の「資料の単純な読み取り」や「知識そのものの有無を問う」問題を「知識・技能」として判断した。「歴史的思考力」は，単純な知識の活用を意味するものではない。令和４年度から施行される新たな「学習指導要領」も見据えて，地理歴史科目における「見方・考え方」や「思考力・判断力・表現力等」を踏まえた，世界史における思考力の

在り方について今一度ご検討いただきたい。今年度の問題は，従来のような知識の丸暗記では解答することが難しく，歴史の授業における知識の在り方を問い直すものであった。今後は，高校の現場における授業改善へ向けて，「知識を問う問題の良化」の段階からさらに一歩進み，「資料の読み解き」→「課題の設定」→「仮説」→「検証」→「根拠のある見解」という学びのプロセスをたどり，歴史的な思考によって知の質が転換する場面を追体験できるような出題をお願いしたい。

最後に，問題作成に当たり，ご尽力いただいた委員の皆さまに感謝申し上げたい。

世　界　史　B

1　前　　文

共通テスト⑴における「世界史Ｂ」の受験者数は85,690名と，昨年度より5,919名減少したが，科目選択率は0.2ポイント増の23.0％となっている。共通テスト⑴の平均点は63.49点であった。

以下，問題についての細部にわたる検討は，「世界史Ａ」と同様の観点で行っている。

2　内容・範囲

（1）評価の観点

年度・出題数 設問形式	令和３年度 出題数	（　出題率　）
主に知識・技能を評価するもの	28	（ 82.4 ％ ）
主に思考・判断を評価するもの	6	（ 17.6 ％ ）
合　　計	34	（ 100.0 ％ ）

（2）分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	令和３年度 出題数	（　出題率　）
政治史	18	（ 52.9 ％ ）
社会経済史	5	（ 14.7 ％ ）
文化史	7	（ 20.6 ％ ）
複数分野に関わる	4	（ 11.8 ％ ）
合　　計	34	（ 100.0 ％ ）

＊知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は、評価・分析委員会の判断による

（3）時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	令和３年度 出題数	（　出題率　）
古代史	3	（ 8.8 ％ ）
中世史	2	（ 5.9 ％ ）
近世史	5	（ 14.7 ％ ）
近代史	11	（ 32.4 ％ ）
現代史	6	（ 17.6 ％ ）
［うち戦後史］	3	（ 8.8 ％ ）
複数時代混合	7	（ 20.6 ％ ）
合　　計	34	（ 100.0 ％ ）

（4）地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	令和３年度 出題数	（　出題率　）
西欧・北米	10	（ 30.3 ％ ）
東欧・ロシア	5	（ 15.2 ％ ）
東・内陸アジア	8	（ 24.2 ％ ）
南・東南アジア	4	（ 12.1 ％ ）
西アジア・アフリカ	1	（ 3.0 ％ ）
中南米・オセアニア	0	（ 0.0 ％ ）
複数地域に関わる	5	（ 15.2 ％ ）
合　　計	33	（ 100.0 ％ ）

中世（5c～14c）・近世（15c～17c）・近代（18c～19c）・現代（20c～）を判断の目安とする。

第１問　資料と世界史上の出来事との関係

問１　『史記』内の人物を穴埋めし，その人物の統治内容について適当な文を選択する組合せ問題。資料を熟読せずとも，問題文中の「始皇帝」から正答を連想できてしまう知識問題。

問２　リード文中の下線部に関連して，世界史上の思想統制について適当な文を選択する問題。従来型の知識問題であるが，同テーマについて時代・地域が多岐に渡る選択肢である点が評価できる。

問３　下線部の抽象的説明について，該当する具体的政策を選択させる問題。思考を促す狙いがあるが，「経済」と「物価の統制」がキーワードとして単純に結びつき，解答できてしまう。

問４　提示された資料の前提となる出来事を選択させ，資料の大意を読み取るという組合せ問題。新課程につながる良問であるが，知識の有無と単純読取りで解答できてしまう面もある。

問５　「嫌われた」という表現の意図について考え，具体的事象を選択する問題。フランス革命に関する他の選択肢が配置されていれば，意図について思考する良問になりえたが，実際には関連性のない選択肢が多く，簡単に正答にたどり着けてしまう。

第２問　世界史上の貨幣

問１　グラフから確認された年号について，それ以前の出来事を選択する問題。グラフの内容とは関係のない選択肢の羅列により，単なる時代暗記問題となってしまっている。

問２　19世紀初頭のイギリスに関する仮説について，それに関わる知識の選択と，二つのグラフの読み取りを組合せた問題。この設問は単純な読み取りに終わってしまったが，二つの資

料を関連させることは，技能や思考を評価する良問への可能性が感じられる。

問３　図の金貨に刻まれている君主について，その事績として適切なものを選択する問題。図の読み取りではなく，図の解説文から解答できてしまい，資料不要の問題になってしまっている。

問４　16世紀の中国での銀の様子について，適当な文を選択する問題。解答の根拠が「16世紀」というキーワードしかなく，会話文の「丁銀」が，受験者を誤答に導いた可能性がある。

問５　貨幣の材質の変遷について，適切な組合せを選択する問題。時代を横断する視点を問うた点が評価できる。

問６　会話文中のトルコの有力者について，その事績を選択する問題。会話の趣旨と関係のない設問

第３問　文学者やジャーナリストの作品について

問１　デカメロンの作者と当時の文化の特徴について，適切な組合せを選択する知識問題。

問２　デカメロン中に登場する病名と，病の説明として適切な文の組合せを選択する問題。資料の単純な読取りと知識によって解答可能。

問３　リード文の下線部の修道院について，適当な文を選択する問題。中問のテーマと関係のない，従来型の知識問題。

問４　資料中の下線部に関連して，宗教と教育・政治について，適当な文を選択する問題。選択肢は，時代・地域が多岐に渡っているが，テーマが広すぎるため選択肢間の関連が薄い。

問５　資料中の空欄について，当てはまる語を選択することと，下線部に該当する事項選択の組合せ問題。解答には思考を要するが，「官僚」「革命家」という語が，歴史概念というよりは一般名詞的であり，言葉のニュアンスと文脈を捉える，国語力によるところが大きい問題である。

問６　資料中の「農奴解放」について，当てはまる人物と，その事績の組合せを選択する問題。事績については細かい知識が問われているが，消去法による解答も可能。

問７　筆者の社会主義への反発について，その背景に関する適切な文を選択する問題。トロツキーとスターリンの対立を想起させる部分もあるが，単純な年代知識により解答可能である。誤答となる選択肢の検討が重ねられれば，良問になり得ただろう。

問８　18世紀中国での史料改ざんについて，その書物の名称と改ざんの意図を説明した文の適切な組合せを選択する問題。改ざん内容を読み取り，その意図について思考させるという良問。

第４問　国家や官僚による文書

問１　資料で提示された条約について，その戦争名と条約名の組合せを選択する問題。問題文に記された経緯説明から知識により正答が導けてしまう。この説明は必要なかったのではないか。

問２　条約文中の空欄について，当てはまる地域を地図から選択する問題。ブルガリア自治国化という既習知識を，実際の条文において具体化させる過程に，思考が促される良問。

問３　資料の条約後に起こった出来事について，２つの文の正誤を判定させる問題。単純な知識問題。

問４　資料中の空欄について，当てはまる国名の組合せを選択する知識問題。会話文を読めば解答できてしまい，資料は不要となる。会話文は削除し，資料だけの設問で良かったのではないか。

問５　三つの資料について，時代順に整序する問題。資料間の関係から前後を推測することも

できるが，年代知識による解答も可能。

問６　会話文中の中国の国際状況について，適当な文を選択する問題。会話文の展開から背景を捉えて解答することもできるが，選択肢に単純な誤答が多いので，知識問題として解答可能。

問７　資料中の空欄の言語について，その言語で書かれた作品名と，正しい資料の読取りを選択する組合せ問題。資料から読取り，知識をつなぎながら解答する問題だが，選択肢の誤答が単純な知識事項として排除でき，また，後半の資料読取りも書かれたままを選択する単純読取り問題。

問８　資料から読み取れる内容と，イギリスの植民地政策として適切な文を選択する組合せ問題。どちらもイギリスの植民地支配の在り方を問うものとして連動している点は評価できるが，前半は資料に書かれたままの単純読取り，後半は知識の有無によって解答可能である。

問９　下線部のインド時代の文化について，適切な文を選択する問題。会話文の趣旨とは関係のない従来型の知識問題。

第５問　旅と歴史について

問１　地域１の説明について，過去の出来事として誤っているものを選択する問題。

問２　地域２の説明中の空欄国についての文と，説明中の戦争に関する空欄についての文を選択する組合せ問題。説明中のキーワードが少なく，複数の知識を合わせて考えることが必要。

問３　地域１～３を判定し，ローマ帝国の支配下に入った順に整序する問題。ローマ帝国拡大の全体像を捉える必要があるが，帝国拡大過程を暗記している受験者にとっては知識問題となる。

問４　会話文中の人物，空欄に当てはまる文を選択する組合せ問題。人物は単純読み取りの上での知識として，空欄は単純読み取りとして解答できる。

問５　会話文中の思想を朱子学と判定し，その内容についての適当な文を選択する問題。朱子学と陽明学の関係を捉えさせる狙いがあったと考えられるが，王陽明ではなく王守仁であったこと，王重陽が紛らわしい選択肢であったために，細かな知識を問う難問となってしまった。

問６　19世紀の朝鮮の出来事について，時代順に整序する問題。名称ではなく内容記述とされている点に工夫がみられるが，その記述のキーワードから容易に出来事の名称を想起でき，知識問題となってしまっている。

３　分量・程度

分量に関しては，試験時間に見合った適切なものである。ただし，資料が多用される問題形式において，資料の内容や分量が，受験者の能力判定と無関係になっている点があるようであれば，検討も必要である。

難易度は標準であるが，単純な読み取り問題が多かったことで，難度が下がった点も否めない。

4 は，「資料論」という資料を読み取らせるという意欲的な出題である。資料の扱いを重視する新課程につながる出題であると評価できる。ただし，設問そのものは，**あ・い**は知識による判定，**X・Y・Z**は資料に書かれている通りに読取れば正答に至る。ブロックの主張に沿って，受験者に資料の分類をさせてみるなど，資料を扱う技能自体を設問にできれば，この資料を出題した真意が生きると思われる。**7** は，二つのグラフを関連させるという作業が正答率を引き下げた可能性がある。複数の資料の比較は，資料を読み取った上での新たな判断を迫るものであり，思考を促す問題作成として参考となるであろう。**16** は，「官僚」「革命家」という言葉の語感と，資料の文脈を

捉えるという思考が要される良問であるが，国語力で解けてしまうという批判も免れない。19 は，改ざんをテーマとするインパクトのある出題である。宋と異民族の関係について，異民族王朝である清が改ざんするという，入れ子状態の設定になっている。そのため，選択肢の「想起する」の主語が分かりにくく，問いの狙いが十分に発揮されていない。改ざん内容の読取り自体は，資料読解の技能であるが，改ざんの意図について思いを巡らすことは，歴史特有の思考である。資料の読取り段階，改ざん意図を吟味する段階に設問を分割するなどして，改ざん意図についてフォーカスする問いになれば，更なる良問になったと思われる。

3・21 は，抽象化や具体化を促す良問であるが，選択肢内の説明や，前問との知識の連動によって解答できてしまう。他にも，資料を起点とした工夫のある設問であるものの，問題文内に記されたキーワードや選択肢における消去法など，結局のところ知識の有無だけで解答できてしまうものが散見された。問いの意図が生徒の能力判定として十分に生かされるように，問題文や誤答となる選択肢などについて，吟味をお願いしたい。

4　表現・形式

第２問Ａでは，二つのグラフを照らし合わせて，その背景について仮説を立てるという形式が出題された。これまで，過去に対する固定的な知識を吸収させることに偏ってきた歴史教育において，仮説（真実とは限らない）を立てるという営みは，授業改善へ向けて刺激的な場面設定であったと思われる。今後は，仮説を複数個立て，資料をエビデンスとして用いながら検証するところまで，設問化されることを期待したい。

第４問Ｃでは，資料について生徒と教師が対話するという場面が設定されている。資料に対して，生徒が問いを発している部分があるが，こうした生徒目線の問いが，そのまま設問となれば良かったように思う。共通テストでの場面設定が，生徒の素朴な疑問が起点となる授業実践の良例となるよう，改善を期待したい。

5　まとめ（総括的な評価）

共通テスト⑴「世界史Ｂ」では，資料の扱い方，資料の改ざんをテーマとする出題がなされ，歴史とは過去の事実そのものではなく，資料によって構築された歴史事象であることを受験者に気付かせる，非常にメッセージ性の強いものとなった。こうした点は，歴史総合や探究科目を間近に控えた高校現場の教員にとって，熱烈に歓迎されるものであったと思われる。

しかし一方で，共通テストは受験者の能力を判定する試験であることを忘れてはならない。魅力的なテーマや素材が提供されたことに惑わされることなく，設問自体が，生徒の能力を適切に判定するものになっているのか，冷静に分析する必要がある。4，7，13，26，27，32 では，読めば分かるという単純読み取りが出題されており，大部分の受験者がこの点では正解に至っていると思われる。しかし，これらの問題のほとんどは知識問題との組合せによって一つの設問となっており，得点できた者とそうでない者の線引きは，結局のところ知識の有無によってなされた可能性が高い。そもそも，このような単純読取りの能力の判定は必要であるのか，必要であるならば，知識問題と読取り技能の問題は堂々と別個に出題するべきではないのか，検討をお願いしたい。また，歴史において資料の読取りは手段であって目的ではないことに留意したい。資料を読んだ上で何をしたいのか，読取り技能の次の段階に思考が存在する。今試験では，仮説を立てた場面設定，改ざん内容を読み取った上でその意図を考えさせる問い，これらの設問に思考を評価する問題作成への可能性がみえたのではないだろうか。

外部評価分科会においては，各設問を「知識・技能」「思考・判断」として分類する中で様々な議

論があった。今試験では，従来のような一対一対応の知識問題は激減したが，工夫が凝らされた多くの問題も，知識を組合せる，資料読解に既習知識を援用するという段階に終始しており，知識を活用する「技能」を評価する問題であるように感じる。もちろん，従来型の単純知識問題に比べれば，こうしたレベルの出題は大きな前進であり，「技能」を評価する設問も必要とされる出題である。しかし，十分な「思考」を評価する問題作成に向けては，より一層の工夫が必要であろう。複数の知識をつくなぐこと，知識を活用すること，資料を読み取ること，これらのことは，（歴史科目に必要とされる）思考よりは手前の段階にある。「知識」「技能」「思考」の違いを意識し，どのような能力を判定したのか，狙いを明確にし，それぞれの段階がバランス良く配置された問題構成をお願いしたい。

最後に，歴史教育の大きな変容が求められる中，問題作成に当たられた委員の皆さまに感謝申し上げたい。

第２　教育研究団体の意見・評価

○　全国歴史教育研究協議会

（代表者　川瀬　徹　　会員数　約16,200人）
ＴＥＬ　042-392-1235

今年度より，従来の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）にかわり，大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）が始まった。両者を比較しつつ，大学入学共通テスト問題作成方針を参照しながら，高等学校において授業を行う立場から，１の「はじめに」では共通テスト⑴「世界史Ａ」と「世界史Ｂ」の全般的な概略について，２の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について，３の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

１　は　じ　め　に

今年度，共通テストの分析を終えてみて，これまでと同じく問題の内容やレベルともに教科書に準拠しており，日常の授業で対応できる内容になっており，共通テストとして極めて妥当であると考える。出題形式に関しても，設問文だけで答えが導き出せる「基礎的な知識及び技能」に偏った出題を脱却しようという試みが見られることに敬意を表したい。

「思考力・判断力・表現力等」を問う出題は，それ自体では難しいかもしれないが，高等学校学習指導要領（以下［学習指導要領］という。）の地理歴史科の目標は，「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め，国際社会に主体的に生きる民主的，平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う。」とあり，「世界史Ａ」の目標は，「近現代史を中心とする世界の歴史を，我が国の歴史と関連付けながら理解させ，人類の課題を多角的に考察させることによって，歴史的思考力を培い，国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」とある。また，「世界史Ｂ」は，「世界の歴史の大きな枠組みと流れを，我が国の歴史と関連付けながら理解させ，文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって，歴史的思考力を培い，国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」とある。

今回の出題方針にある「歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する」という視点が，実際の作問においてどのように反映されているかということについて，大いに期待するところであった。リード文やそれに付属する図表を精読することでしか解けない出題が今後増えていくことによって，知識・理解だけでなく資料活用能力を見る設問も増加し，単なる暗記物に終わらない高校世界史の本格的な授業が高校の現場で実現できることを期待している私たちからは，共通テストが大学入試問題の一方の頂点に立つべく，更なる御検討をお願いする次第である。

以下，今年度の「世界史Ａ」と「世界史Ｂ」の共通テスト問題について，限られた紙面の中では

あるが，今後の御検討の一助になることを期待して，本協議会の意見と評価を記す。

2　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

⑴　「世界史Ａ」について

今年度の共通テスト⑴「世界史Ａ」の問題は，解答時間60分に対し，大問５問で前年度より１問増え，それぞれ高等学校学習指導要領を反映したテーマ設定がなされている。大問１・２はそれぞれ小問が６問，大問３は小問が９問，大問４・５はそれぞれ小問が６問からなり，配点がそれぞれ19・18・27・18・18であった。全体の解答数が33で，従来に比べ１問増加した。なお，従来通り，「世界史Ｂ」との共通問題はなかった。

出題を正解の選択肢を基に判断すると（以下同じ），時代別に見ると，古代が２問，古代・中世が２問，中世が２問，近世が５問，近代が７問，現代が15問である。第二次世界大戦後に起こった事項に関連した問題は７問あった。

地域別にみてみると，東アジアに関わるものが７問，東南アジアに関わるものが２問，東南アジアと南アジアに関わるものが１問，南アジアに関わるものが１問，西アジアに関わるものが１問，ヨーロッパに関わるものが14問，北アメリカに関わるものが２問，南アメリカに関わるものが１問，世界全体に関わるものが１問であった。アフリカに関わる出題がなく，ヨーロッパ・南北アメリカで過半数を超える出題となり，受験者には取り組みやすいが，いささかバランスに欠く配分であった。

出題形式でみると，肢文のなかから正文または誤文を選ぶものが23問（うち誤文を選ぶものが３問），空欄補充をえらぶものが２問，空欄補充の組合せを選ぶものが３問，空欄補充の語句の組み合わせを選ぶものが２問，空欄補充と関連事項の組合せを選ぶものが２問，年代整序が２問，年表から時期を選ぶものが２問，２文の正誤の組み合わせを選ぶものが２問，地図問題が１問である。空欄補充問題が少なく，基本的な知識をもとに正誤文を選ぶ問題が多い。また，年表や地図を使用した問題も見られる。思考力や資料活用の力を問う工夫がよくなされていると考えるが，例年出題されていた写真を用いた問題はなかった。

第１問は，国際関係・国際貿易関連史に関する出題である。

Ａは，1947年にアメリカの雑誌掲載の時評の文章をもとに出題されている。

問１は，ナポレオン・ヒトラーについての正文選択問題。

問２は，独ソ戦を想定した文を選ぶ正文選択問題。独ソ戦の特徴の理解を必要とする。

問３は，「ソ連の脅威」に関連して採用されたアメリカの政策についての正文選択問題。いずれも標準的な難易度の問題。

Ｂは，イギリスとアメリカの貿易収支についてのグラフ読み取りをもとに出題されている。

問４はグラフ１からの読み取り。「穀物法が廃止」の1846年，「南京条約」の1842年の知識を前提に，「貿易赤字が6000万ポンドに達した」年に関する文の正誤判定を要求している。「世界史Ａ」の教科書には1846年の穀物法廃止が掲載されていないものもあり，その年号（年代）が分からねば解答できない問題は受験者に酷であろう。

問５は，世界史上の輸出入に関する誤文選択問題。

問６は，空欄補充と正文選択の組み合わせ問題。リード文中の［ア］から，「国を二分する内戦」からアメリカ合衆国であることを読み解いた上で，「アメリカからイギリスへの輸出」が10倍以上に増加したのに対して，「アメリカのイギリスからの輸入」が５倍程度の増加であったことを読み解くことで，正答を導く。肢文「Ｘ　イギリスからアメリカへの輸出額の伸びが５倍程度にとどまった」ことと「アメリカのイギリスからの輸入が５倍程度の増加であった」こ

とを読み替える読解力が求められる。一部読解力が要求されるが，いずれも標準的な難易度の問題である。

第２問は，世界史上の人物や事件を題材にした映画や絵画に関する出題である。

Ａは，映画「アマデウス」を鑑賞した先生と生徒の対話文をもとに出題されている。

問１は，ヨーゼフ２世とその事績の組合せを問う空欄補充問題。

問２は，イタリアが文化的な先進地域であった「要因」に関する誤文選択問題。問３は，対話文の映画「アマデウス」の監督フォアマンが「チェコスロバキアで生まれ，1968年に現地を離れた」というところから，「ワルシャワ条約機構軍が軍事介入した」プラハの春を選択させる正文選択問題。一部読解力が要求されるが，いずれも標準的な難易度の問題である。

Ｂは，「フランスの歴史と絵画」展示会を訪れた高校生の対話文をもとに出題されている。

問４は，「第二共和政」の成立過程についての正文選択問題。「荒井」の会話において，「六月蜂起」が失業者に仕事を与えるために創設した国立作業場の閉鎖後に起きたことを読み取れれば解答は容易。

問５は，「第二共和政」の成立過程についての空所補充問題。「荒井」の会話で，「隣国との戦争で捕虜になった」ことから［エ］がナポレオン３世，絵画２が，「小島」の会話で，［オ］は普仏戦争の敗戦後「蜂起した民衆によって樹立された自治政府」のパリ=コミューンが「鎮圧された」ことを描いていることが読み取れれば解答は容易。いずれも読解力が要求される問題である。なお，Ｂのリード文が２つのパートに分かれている形式は新しい試みか。

問６は，民衆運動が政治や社会を変革させた事例を問う正文選択問題。一部読解力が要求されるが，いずれも標準的な難易度の問題である。

第３問は，世界史上の君主についての出題である。

Ａは，1913年ギリシア国王の第２次バルカン戦争に関する宣言をもとに出題されている。

問１は，バルカン同盟とその仲介者の組み合わせ問題。

問２は，オスマン帝国に関する正文選択問題。バルカン同盟諸国と争い，「敗れ去った帝国」からオスマン帝国を想起することを要求している。問は，セルビアに関する正文選択問題。ブルガリアと対立した他のバルカン同盟諸国としてセルビアを想起することを要求している。ただし，セルビアの知識は「世界史Ａ」の受験者にとってはかなり厳しいと思われる。一部読解力が要求されるが，いずれも標準的な難易度の問題である。

Ｂは，サラディンの墓所の写真と関連する文章をもとに出題されている。

問４は，十字軍に関する文の正誤の組合せ問題。

問５は，サラディンのもうひとつの棺を19世紀末にドイツが送ったことの背景を問う空所補充問題。問６は，1910～30年代の中東の政治秩序に関する正文選択問題。いずれも標準的な難易度の問題である。

Ｃは，中国の皇帝と日本から訪れた僧との関わりについて述べた歴史書をもとに出題されている。

問７は，宋の文治主義に関する正文選択問題。

問８は，日中交流史に年代整序問題。選択肢の時代が離れていることもあり，解答は容易であろう。

問９は，仏教に関する誤文選択問題。一部読解力が要求されるが，いずれも標準的な難易度の問題である。

第４問は，世界史上の出来事についての「記録」についての出題である。

Ａは，オーストラリアについての３つの資料をもとに出題されている。

問１は，３つの資料の年代整序問題。それぞれの資料が，「流刑植民地の開始（18世紀)」，「ゴールドラッシュ」(19世紀)，「太平洋戦争」であることを読み取る必要がある。意欲的な問題であるが，「世界史Ａ」では，オーストラリアは，英連邦の成立（1931）程度しか扱えない。クックすら扱っていない以上，流刑植民地の年代を受験者に問うのは酷であろう。

問２は，オーストラリアの外交方針に関する正文選択問題。資料１から読み取れる内容を問う。

問３は，インカ帝国に関する２つの空所補充の組合せ問題。いずれも標準的な難易度の問題である。

Ｂは，朝鮮半島に関する歴史上の出来事に関する記録のもとにした出題である。

問４は，朝鮮に関する資料の年代整序問題。それぞれの資料が「1906年」の愛国団体の趣意書，1910年の韓国併合条約，三・一独立運動の宣言書であることを読み取る必要がある。

問５，世界各地の独立運動に関する誤文選択問題。問６は，「漢城」の位置を問う地図問題。いずれも標準的な難易度の問題である。

第５問は，民族間の対立関係や独立運動についての出題である。

Ａは，雷海宗『中国の兵』結論部分をもとに出題されている。

問１は，明末の周辺民族（日本）の動きを問う空欄補充問題。

問２は，中国王朝と周辺民族に関する正文選択問題。問３は，空欄補充と正文選択の組み合わせ問題。「民国27年」から，「西暦1912年」から27年目である西暦1937年を想起することを要求している。読解力・思考力が要求されるが，いずれも標準的な難易度の問題である。

Ｂは，初代インドネシア副大統領モハマッド=ハッタの回想録をもとに出題されている。

問４は，資料読解が要求される正文選択問題。

問５は，資料読解による２つの正文を選択する組合せ問題。ともに資料の読解力が問われる。

問６は，第二次世界大戦中の日本による東南アジア地域の軍事占領についての正文選択問題。標準的な難易度の問題である。

「世界史Ａ」の問題についてまとめてみたい。

「知識の理解の質を問う問題」について，「世界史Ａ」という科目の特性上，限られた知識から出題せざるを得ないので，やむを得ない部分もあるが，若干教科書レベルの知識を超えた出題がみられる。教科書では，前近代における概括的な「ユーラシアの諸文明」の交流，また近現代史も「一体化する世界と日本」や「地球社会と日本」の交流を叙述しているが，個別の「知識」そのものを問う問題が多く単調である。

「思考力，判断力，表現力を発揮して解くことが求められる問題」については，「世界史Ａ」は「思考力・判断力」が単に資料の読解力と読み替えられて出題される傾向が強い。その分，「知識」を直截的に問う問題が目立つ。「世界史Ａ」については，形式こそ変われ，求められる「思考力・判断力」に新鮮さはなかった。ただ読解を伴う分，受験者には難しく感じられると思われる。

資料の読解をもとに「思考力・判断力」を問う問題は，教科書の知識に依らない出題を可能とするもので，ある意味では教科書に記載された知識量が少ない「世界史Ａ」に向いているのではないかと思われる。次期学習指導要領での「歴史総合」では，（まだ公開されていないものの）教科書による記載内容の差異がより大きくなることが予想される。教科書の知識に依らない作題について，一層の検討をお願いしたい。

⑵　「世界史Ｂ」について

大問が５問，小問数34問となっており，前年度までのセンター試験と比較すると大問構成で１

問増加，解答数で２問減少であった。学習指導要領を反映したテーマ設定がなされている。配点は第４問設問Ｂ５，第５問設問Ａ３が２点，その他はすべて３点であり，大問順に15点，18点，24点，26点，17点であった。また，「世界史Ａ」との共通問題はなかった。

出題を年代別に見ると，近代以前が11問，近代以降が23問である。そのうち，19世紀の問題が10問と多く，複数の年代にまたがる問題は２問であった。

地域別に見ると，東アジアが11問，西アジアが１問，南アジアが３問，ギリシア・ローマが１問，ヨーロッパが16問，東アジアとヨーロッパに関わるものが２問であった。東アジアとヨーロッパの出題が多かった。

出題形式で見ると，肢文の中から正文または誤文を選ぶものが14問（うち誤文を選ぶものが３問），空欄補充の語句を選ぶものが１問，複数事項の組み合わせを選ぶものが16問，年代の配列を選ぶものが３問であった。提示された資料としては，グラフが２個，地図が１個，写真が２個，文章資料が15個と，特に文章資料が多かった。試行調査問題よりも，図表やグラフなどの資料数が減り，提示された会話文，史料，条約，文学作品などの文章資料数が増えた。

出題分野で見ると，政治史が24問，経済史が４問，文化史が６問と満遍なく出題された。

大学入学共通テストの第１回目ということで，その出題方針の観点を中心に問題の検討を行う。具体的には問題作成の基本的な考え方を踏まえ，大問ごとに，①歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程が重視された問題であるか。②用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める問題であるか。③事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題であるか。④仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題であるか。⑤歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題であるか，という観点から具体的に検討する。

第１問　「歴史研究と資料，史料と世界市場の出来事」について

Ａは，『史記』に見える始皇帝死亡時の逸話についての概要の文章からの出題。歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程が重視された問題である。

問１　始皇帝の丞相の人物とその人物の統治思想に関する組合せ問題。基本的な内容。

問２　世界史上の思想統制に関する正文選択問題。基本的な内容。

問３　司馬遷による批判の対象となった政策について資料からその内容を読み取る問題。基本的な内容。

Ｂは，歴史家マルク=ブロックの『歴史のための弁明-歴史家の仕事』の一節からの出題。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める問題である。また，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題である

問４　文章の前提となった出来事と，文章の趣旨に関する組合せ問題。前提の出来事の正誤と，文章史料についての趣旨の肢文Ｘ～Ｚの正誤を問題文から読解する必要がある。初見の資料から得られる情報と，授業等で学んだ知識を関連付ける問題であり良問である。

問５　問題文から「嫌われた体制」をフランスの旧制度と読み取りその内容の正誤を判定する問題。基本的な内容。

第２問　「世界史上の貨幣」について

Ａは，イギリスにおける金貨鋳造量の推移グラフ（1750～1821）についての出題。仮説を立

て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題である。

問１　イギリスの金貨鋳造量が500万ポンドに達した時期を1776年頃と読み取り，アメリカ独立革命中の出来事である❷のボストン茶会事件を選ぶ問題。基本的な内容。

問２　金貨鋳造量が100万ポンドを下回り続けた時期をグラフ１から読み取り，その時期の紙幣流通量をグラフ２から読み取る問題。２つのグラフを比較し関連性を読み取り仮説を考察する。歴史的思考力を図る良問である。

問３　ヴィクトリア女王期のイギリスについて資料の図から読み取る問題。年号から時期を判定する基本的な内容。

Ｂは，博物館に展示されたアジアの貨幣に関する会話文についての出題。歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題である。

問４　中国の税制度に関する問題。空欄ウ手前の16世紀から明の説明を選ぶ基本的な内容。

問５　中国の貨幣の材質の変化に関する問題。基本的な内容。

問６　ムスタファ=ケマルの事績に関する問題。会話文から空欄に当てはまる人物を想起しその人物の事績についての誤文選択問題。基本的な内容。

第３問　文学者やジャーナリストの作品について

Ａは,『デカメロン』とその解説文についての出題。歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題である。

問１　『デカメロン』の作者名とその時代の文化の特徴に関する組合せ問題。基本的な内容。

問２　ペストとその説明に関する組合せ問題。基本的な内容。

問３　修道院や修道会に関する正文選択問題。修道院や修道会に関する正確な理解が求められた。

Ｂは，大庭柯公のロシアの革命運動に関する論評についての出題。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める問題である。

問４　世界史における宗教と教育・政治に関する誤文選択問題。基本的な内容。

問５　19世紀のロシアの政治運動に関する空欄補充とスローガンの組合せ問題。資料の論評を読み取り，その内容と知識を結び付ける読解力と思考力を図る良問である。

問６　資料中の空欄に入れる人物名とその人物の事績に関する組合せ問題。資料の農奴解放からアレクサンドル２世を，事績のＹクリミア半島獲得からエカチェリーナ２世を想起し解答する。

Ｃは，ジョージ=オーウェルの小説『1984』の討論についての出題。歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程が重視された問題である。また，用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や色互の関連等について，総合的に考察する力を求める問題である。

問７　資料から『1984』の執筆に関する背景を読み取る問題。基本的な内容。

問８　『四庫全書』の名称とその改ざんの意図に関する組合せ問題。同一資料の改ざん前後を比較し，改ざんの意図を考察することが求められた。思考力が問われた良問である。

第４問　国家や官僚が残した様々な文書についての出題。

Ａは，ベルリン条約の内容の一部からの出題。仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題である。

問１　露土戦争（ロシア=トルコ戦争）とサン=ステファノ条約の組合せ問題。資料の内容から破棄された条約なのか新たに結ばれた条約なのかを読み取る。基本的な内容。

問２　資料からブルガリアを読み取り，その位置を地図から選択する問題。オスマン帝国の自治公国として国際的に認められたブルガリアの正確な位置の理解が求められた。

問３　ベルリン条約締結後に起こった出来事について述べた文の正誤判定問題。基本的な内容。

Ｂは，上の動物公園での会話文からの出題。仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題である

問４　資料Ｘ（ニクソン訪中），資料Ｙ（中ソ友好同盟相互援助条約），資料Ｚ（日中共同声明）から空欄イ・ウに入れる適語を選択する問題。基本的な内容。

問５　資料Ｘ（ニクソン訪中），資料Ｙ（中ソ友好同盟相互援助条約），資料Ｚ（日中共同声明）の３つに資料がいつの時代かを読み取り，それを時代順に並べ替える問題。資料ＸとＹは同年の資料であるが，アメリカ合衆国の外交政策に日本が追随する国際政治の展開の理解が問われた。共通テストの問題としては細かい内容であった。

問６　1972年当時の中華人民共和国の国際環境についての正文選択問題。基本的な内容。

Ｃは，英領インドの統治に関する文書とそれに関する授業からの出題。仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題である

問７　資料中の空欄を補充と，資料の内容から読み取れる事柄の組合せ問題。資料中の空欄を補充した上で資料を読解し，その内容を選択する。読解力と思考力が求められた良問である。

問８　インドにおける英語教育導入の動機とイギリスの植民地政策の特徴の組合せ問題。資料及び会話文の内容から肢文の内容を考察する。読解力と思考力が求められた良問である。

問９　ムガル帝国時代のインドに関する正文選択問題。基本的な内容。

第５問　旅と歴史について

Ａ，ヨーロッパにおける旅と歴史に関する旅行記からの出題。歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題である。

問１　地域１（シチリア島）に関する誤文選択問題。基本的な内容。

問２　地域２（ロンドン）の歴史について述べた文と空欄イに入れる文の組合せ問題。基本的な内容。

問３　地域１～３が古代ローマに支配された時期に関する配列問題。古代ローマによる周辺値域の征服過程について正確な理解が求められた。良問である。

Ｂ，韓国における石碑に関する会話文からの出題。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める問題である。

問４　空欄ウの人物名と空欄エの文章の組合せ問題。基本的な内容。

問５　空欄オに入る文章の選択問題。朝鮮で朱子学が重んじられたこと，その朱子学を王守仁が批判したことに関する理解が求められた。

問６　19世紀の朝鮮で起こった出来事に関する年代配列問題。壬午軍乱，甲申政変，甲午農民戦争についての正確な理解が求められた。

全体を通じて，リード文におけるテーマ性の工夫がなされ，歴史を学ぶ意義を考えさせるメッセージが伝わる出題であった。歴史の学び方や現代的な諸課題を捉える上で必要なテーマ設定がなされており，「歴史的思考力」を育むために必要不可欠な文章資料等の購読の重要性を再認識する出題であった。

また，学習指導要領に準拠し，その趣旨を反映した基礎学力を問う出題である上に，知識の有無が問われる問題ではなく，解答に至る過程で文章読解や資料の読み取りが根拠になるなど，リ

ード文，史資料を生かした出題であり工夫がなされていた。総じて，知識・理解が求められる設問だけでなく，思考力・判断力や初見の史資料の活用の技能を図る設問の工夫があった。問題作成にご尽力なされた方々に，感謝申し上げたい。

３．ま　と　め

今年度は，共通テストとしての初年度であり，出題方針の変更等もあって，どのような問題が出題されるのかという点において，例年以上に注目を集めたことと思われる。「世界史Ａ」「世界史Ｂ」ともに，試行調査に見られた資料の読解を求める問題が増えた一方で，試行調査にみられた，世界史の知識がなくても資料の読解だけで解けてしまう問題が見られなくなり，より適切な出題がされたと考える。

「世界史Ａ」について。本年度の問題も，全体を通じて基本的な知識・理解をもとに正誤文の選択や年代整序，地図や年表問題によって思考力を問うものであり，高等学校における学習内容に沿ったものとなっている。例年指摘させていただいていることが，「世界史Ａ」の場合，教科書によって記述内容に特色があり，取り上げる事項についてもばらつきがある。「世界史Ａ」の受験者は，専用の用語集や受験用参考書を購入しない場合もあり，教科書のみで学習を行うことが多いと思われる。資料の読解をもとに「思考力・判断力」を問う問題は，教科書の知識に依らない出題を可能とするもので，ある意味では教科書に記載された知識量が少ない「世界史Ａ」に向いているのではないかと思われる。かねてより各社の教科書を精査し，教科書によっては記載のない事項が解答に影響するようなことがないようご配慮を願っているが，改めてより一層の工夫をお願いしたい。問題の配分については，近現代史を中心として位置付ける学習指導要領や高等学校における授業の時間配分にも合致した内容であり，「世界と日本の結び付き」などのように学習指導要領の主旨に沿った出題も多く見受けられた。ただ，欧米に関する出題が過半数となる一方，アフリカ史が出題されないなど，いささかバランスに欠ける構成となった。戦後史に関わるものも７問にとどまり，「世界史Ａ」の科目の特色が活かせていない印象を受けた。

「世界史Ｂ」について。今年度の共通テストの問題は，正誤文判定問題中心，出題分野も政治史中心で知識重視の構成から脱却しようという試みがみられた。例年同様リード文が大変読みやすく，史料や会話文を多く用い，興味深い内容であり，受験者の歴史への興味関心を喚起するものが多い。今年度の受験者数は85,690人で，昨年度の91,609人から大幅に減少した。一方で平均点は63.49点で昨年度の62.97点より若干上がった。また，「日本史Ｂ」，「地理Ｂ」との平均点の差は4.2であり大きなばらつきはなかった。今後もこのような作問をお願いしたい。昨年指摘させていただいた戦後史の出題については，「日本史Ｂ」との差異がみられなかったことを評価したい。

例年指摘させて頂いているが，センター入試に求められているのは，落とすための問題ではなく，受験者の高等学校における学習活動や成果が評価されるような問題ではないか。本稿における共通テスト問題の評価もかかる視点によるものである。今年度も，ここ数年間と同様に問題の配分が学習指導要領や教科書の記述量，そして何よりも高校現場における「世界史Ｂ」の授業における時間配分に充分配慮された出題であると考えている。また，出題の形式・内容についても，全体的に奇をてらうことなく言わば「定番」とされる問題が出題されていて，高校の授業に即した，まさに「入試問題のスタンダード」といえる作題であると考える。それゆえに高校で学んだことをきちんと理解している受験者にとっては解きやすく，勉強していない者は正答できないという良問が揃えられている点で高く評価している。次年度以降も，同様な傾向の作題をしていただくことを切に願うものである。

第３　問題作成部会の見解

世　界　史　Ａ

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問

第１問は，「国際関係や国際貿易の歴史」をテーマとし，資料を基に19世紀から20世紀にかけての国際関係を考えさせた。

Ａでは，1947年にアメリカの雑誌に掲載された論文を資料として，ヨーロッパの外交政策の知識，独ソ戦の性質についての理解，冷戦期の封じ込め政策を資料から考えさせることを意図して出題した。問２は資料読み取りと思考力を問う新方式の問題であり，やや正答率が低めであったが，正解者のほうが多く，難易度設定は適正であったと思われる。

Ｂでは，イギリスやアメリカ合衆国の貿易統計を素材とし，19世紀におけるイギリスの自由主義的改革とアジア進出の過程について，世界史で学んできた知識とグラフとを関連付けて考察する力を問うた。具体的には19世紀におけるイギリスとアメリカ合衆国の貿易収支に関するグラフとその解説を資料として取り上げた。正答率・得点率に多少のばらつきがあるものの，極端な解答結果は出ておらず，いずれの小問についても正答率・識別性の点で妥当であった。

第２問

第２問は「世界史上の人物・事件を題材にした映画や絵画」をテーマとし，映画や絵画で取り上げられた事象や，その制作背景を問う出題とした。正答率が低い問題も含まれるが，識別性の点で全体には妥当な問題であった。

Ａでは，映画「アマデウス」を題材にした授業中の会話を取り上げ，主として近現代の中部及び東部ヨーロッパの政治的情勢と結び付けて考えさせることを目的に出題した。

Ｂでは，絵画鑑賞時の会話を取り上げ，文脈から近代フランスの政治体制の成立過程について考察する力を問うた。

第３問

第３問では，バルカン半島，中東，中国を事例に，「世界史上の君主」について考えさせることを目的に出題した。一部正答率が平均よりも低い小問もあったが，おおむね妥当であった。

Ａでは，ギリシアの国王が出した宣言文を資料として取り上げ，近現代ヨーロッパ諸国で起こった出来事について，オスマン帝国の衰退と国際情勢と関連付けて考察する力を問うた。

Ｂでは，サラディンの墓所の写真を資料として取り上げ，その写真を解説する文章を基に，西アジアの歴史に関して，19世紀後半から20世紀前半を中心に，幅広い年代の理解を問うた。正答

率は低めであり，識別力は高かった。

Ｃの問８では，日本の対外関係についての基本的な事項が，時代の推移のなかに位置づけられているかを問うた。いずれの設問も学力の識別性は十分だった。

第４問　第４問は,「世界史上の出来事の記録」をテーマとし，オーストラリアと朝鮮を中心とする歴史的事象の時系列や因果関係について考えさせることを意図して問題作成した。

Ａでは，オーストラリアおよびアメリカ大陸における歴史上の出来事の記録を資料として取り上げた。いずれの小問についても，正答率・識別性の面で妥当であった。

Ｂは，朝鮮半島に関する歴史上の出来事に関する記録の基にした出題であった。具体的には朝鮮半島の近現代史にかかわる３つの資料を取り上げ，それと関連するかたちで世界各地の独立運動についても問うた。正答率・得点率に多少のばらつきがあるものの，極端な解答結果は出ておらず，いずれの小問についても正答率・識別性の面で妥当であった。

第５問

第５問は,「民族間の対立関係や民族独立の運動」をテーマとし，中国や東南アジアを中心とする歴史的事象の推移及びその背景について考えさせることを意図して問題作成した。

Ａでは，中国と諸外国との関係について述べた文章を資料として取り上げた。問１で識別力がやや低い結果が出たが，全体として正答率・識別性は妥当なものであった。

Ｂでは，後にインドネシア共和国の副大統領となるモハマッド＝ハッタの回想録を資料として取り上げ，近代アジアにおける民族主義運動の背景について，国際情報と関連付けて考察する力を問うた。解答結果は，おおむね予想どおりで，解答分布表からも妥当なものと判断される。

３　出題に対する反響・意見等についての見解

第１問

第１問のＡでは，問２を良問として評価していただき，他は基本的な問題であるとのことだった。確かに平易な知識問題ではあるが，特に問３は中問リード文と資料をよく読まなければ正解にたどり着かない問題であった。

Ｂは，グラフを読み取って解答する小問を中心に構成されている。問４は年号の知識で解答する問題であり，問６についてもグラフが十分に活用されていないとの評価を受けた。問５は単純な知識問題であるとの評価を受けた。問４と問６はグラフを読み取らなければ解答できない出題形式になっているが，思考力や判断力を問うように，グラフをより積極的に活用する問題へと出題形式を工夫していきたい。

第２問

第２問のＡについては全体に知識を問う標準的な問題と評され，実際の正答率は予想より若干低かったものの，識別力は備えていたと判断される。なお問３については，ある映画監督の移住という教科書に記載されていないリード文中の出来事と，教科書の記述とをつなげて思考させることを意図したが，問いかけの形式に精査が必要との指摘もあり，今後の課題と思われる。

Ｂでは，問４と問５について，会話文を読み解く力が必要とされる問題と評された。正答率や識別性をみると，概ね適切な難易度だったと思われる。問６は，選択肢に正命題が一つしかないため知識による正誤判定問題となっていると指摘された。指摘の通りではあるが，各選択肢の正しい理解を問うことが出題の意図でもあった。今後いっそう問題作成の工夫に努めたい。

第３問

第３問のＡの問１と問２については，資料読み取りがやや難しい問題であるが，資料を読み取ることができれば，全体的には標準的な難易度の問題と評価された。

Ｂの小問は，３問とも知識を問う標準的な問題と評されたとおり，基本的な知識を正確に理解しているかを識別するものであった。

Ｃの問７については，知識と思考の組合せ問題だと評価された。問９は，資料や中問のテーマとの関連性がないとの指摘を受けた。

第４問

第４問のＡでは，オーストラリアの歴史に関する問１・問２について，良問であるとの評価を得た。同時に難易度の高さへの懸念も示されたものの，解答結果の正答率・識別力から判断すれば，標準的な出題内容であったと思われる。

Ｂでは，問４は，３つの資料について，年代の古い順から正しく配列されているものを選択する問題であり，問５は，世界の各地で起こった独立運動について，誤った文を選択する問題であったが，資料の提示の仕方や，出題の方法により工夫を施す余地も残された。問６は，地図を用いた問題であり，歴史学的知識と地理学的知識を織り交ぜて解答させるという点で，意義あるものであった。

第５問

第５問のＡでは，読解力・思考力が必要であるものの難易度は標準的という評価を得たが，問１は解答にばらつきがあり識別力がやや低かったと考えられ，今後の問題作成では留意したい。問３は，注があることで単純な知識問題となり，資料との関係が薄いという指摘もあったが，正確な地名を選んだうえで日中戦争勃発に結びつける歴史推移の正しい理解を問うており，資料読解と知識とを結び付けることを意図したものである。

Ｂについては，使用されている資料の題材は，適切であるとの意見を得た。資料の読み解きから，情報を抽象化する思考のプロセスを問う問題となっていると評価され，同時に知識の有無を問う問題と組合わさっていることが指摘された。

４　まとめ

以上，問題作成部会として，各問の出題意図と，設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ，問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

まず，問いの内容は，教科書に準拠した日常の授業で対応できるものであり，共通テストとして妥当だと評価された。リード文や資料を見ずに，設問文だけで答えが導き出せる出題を脱却することに努めたが，この点についても評価していただいた。また，歴史を学ぶ意義を考えさせるとともに，歴史の学び方や現代的な諸課題を捉える上で必要なテーマ設定がなされているとの評価をいただいた。

出題のバランスについては，アフリカに関わる出題がなく，ヨーロッパ・南北アメリカで過半数を超え，受験者には取り組みやすいが，いささかバランスに欠けるとの指摘があった。時代別では「世界史Ａ」の指導要領・教科書のテーマに即して，近世から戦後にかけての時代に重点をおき，古代・中世にかかわる問いは６問に抑えた。

出題形式に関しては，グラフ・地図・年表の活用や，空欄補充とグラフの読み取りとの組合せなどにより，思考・判断を問うことを試みたことも評価された。その一方で，「歴史的思考力」よりも，知識の有無を問う問題が少なくなかったとの指摘もあり，「知識を問う問題の良化」の段階からさらに一歩進み，「資料の読み解き」→「課題の設定」→「仮説」→「検証」→「根拠のある見解」という学びのプロセスをたどり，歴史的な思考によって知の質が転換する場面を追体験できるような出題を，という課題を与えられた。

以上の指摘・意見を踏まえて，基礎的な歴史知識を生かした「歴史的思考」に受験者を導き，思考力・判断力・表現力等を測定する設問を作るよう心がけたい。

世　界　史　Ｂ

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問

第１問は，「資料と世界史上の出来事との関係」をテーマとした。

Ａでは，司馬遷の『史記』を資料として取り上げた。いずれの小問についても，正答率・識別性の面で妥当であった。

Ｂでは，マルク=ブロックの『歴史のための弁明―歴史家の仕事』を資料として取り上げ，初見の資料と授業で学んだ知識を関連付けて考えさせることを意図した。いずれの小問についても，正答率・識別性の面で妥当であった。

第２問

第２問は，「世界史上の貨幣」をテーマとし，貨幣の流通状況や歴史的役割について解答させた。

Ａでは，イギリスの金貨と紙幣に関する統計を素材とし，近代における世界史上の出来事について，世界史Ｂで学んできた知識とグラフから読み取った内容とを関連付けて考察する力を問うた。具体的には近代のイギリスにおける金貨鋳造量及び紙幣流通量のグラフと，19世紀に鋳造された金貨の写真を資料として取り上げた。いずれの小問についても極端な解答結果は出ておらず，正答率・識別性の点で妥当であった。

Ｂでは，アジアの貨幣を題材にした先生と生徒との会話を取り上げ，東アジアの交易と中国社会の変化，貨幣と王朝の関連，および，トルコ共和国の近代化政策について考察する力を問うた。正答率はやや高めであったが，識別性は妥当であった。

第３問

第３問は「文学者やジャーナリストの作品」をテーマとし，それぞれの作品の題材となった歴史的事実や，類似する他地域の状況を問う出題とした。全体に予想より正答率が高くなったが，識別性の点では妥当であったと思われる。

Ａでは，『デカメロン』におけるペスト禍にまつわる記事を取り上げ，時代や地域を超えて，特定のテーマに基づく同時代の歴史文化の背景を歴史的記事の読解および文化背景の理解を問う出題とした。

Ｂでは，日本人ジャーナリスト大庭柯公による論評を取り上げ，19～20世紀の革命運動を中心に，国際情勢を含め，近現代ロシアの歴史的事項に関する理解を問う出題とした。

Ｃの問７は『1984年』の主題である全体主義体制の広がりや継起についての理解を問おうとしたが，年代知識により解答可能になってしまった。

第４問

第４問は，近現代のバルカン半島，中国の国際関係，英領インドを事例に，「条約などの文書」を読み解くことで，知識力と理解度を探るテーマが出題された。正答率が高い小問もあったが，おおむね妥当なものであった。

Ａでは，19世紀のバルカン半島をめぐる条約を資料として取り上げ，国際関係の展開について知識と理解を試す問題を作成した。

Ｂでは，会話文と資料を基に，近現代中国の外交・戦争・内政について考察する力を問うた。正答率については，問５については妥当であったが，問４については高く，問６については逆にやや低かった。

Ｃは，英領インドのイギリス人植民地行政官による覚書を資料として取り上げた。いずれの小問も，識別力の点では妥当と考えられるが，正答率は問８がやや低かった。

第５問

第５問は，「旅と歴史」をテーマとし，ヨーロッパと朝鮮を中心とする歴史的事象の時系列や因果関係について考えさせることを意図して作問した。

Ａでは，旅行記をもとに，シチリア島（地域１）・ロンドン（地域２）・アテネ（地域３）を判別した上で，ヨーロッパ・地中海を舞台に展開された歴史的事象を取り上げた。いずれの小問についても，正答率・識別力の面で妥当であった。

Ｂでは，19世紀に朝鮮で作られた石碑を資料として取り上げた。正答を導き出すために二段階の思考を必要とする問５，朝鮮近代史の流れを問うた問６は，ともに正答率は高くなかったが，識別力の面では妥当であった。

３　出題に対する反響・意見等についての見解

第１問

第１問のＡは，問２で時代・地域が多岐にわたる選択肢を設けた点が評価された。問３は受験者の思考を促すねらいが評価された一方，経済と物価統制が単純に結びついてしまう可能性が指摘された。ただし，比較的長いリード文の下線部を注意深く読むことが前提となっており，読解力を求める意図を込めたものである。

Ｂの問１は，初見の資料と知識を関連させて考えさせる良問との評価を得た。問２については，資料中の表現の意図を考える良問だが，選択肢の配置からは基本的内容の問題と評価された。正答率・識別力から判断すれば，標準的な出題内容であったと思われる。

第２問

第２問のＡは，グラフや写真を読み取って解答する小問から構成されている。問１は年代の知識問題に，問２は単純な読み取り問題になっているとの評価を受けた一方，特に問２については複数のグラフを使用しており，歴史的思考力を問う良問であるとも指摘された。問３は写真の解説文だけで解答可能な問題になっているとの評価を受けたが，写真の読み取りを前提とする問題である。思考力や判断力を問うように，グラフや写真をより積極的に活用する問題へと出題形式を工夫していきたい。

Ｂの３問の小問は，いずれも基本的な内容と評され，基本的な知識と会話文の読み取りを組み合わせることで，アジアの歴史を考察する力を識別できたと思われる。問５については，時代を横断する視点を問うた点が評価された。

第３問

第３問のＡの問１と問２については，歴史をテーマとした作品と作者の属する文化背景，記載

内容に対する正確な理解を併せて求めたことについて，基本的な内容の確認であり正答率も高かったが，問３も識別率の高さが確認され，テーマの理解，歴史を学ぶ意義を考えさせるメッセージが伝わる出題と評価された。

Ｂの問５については，日本人ジャーナリストによるロシア革命家論の読解を通じて，個別の事実等に関する知識のみならず，読解力・思考力を図る良問と評価され，それゆえか正答率もきわめて高かった。他の２問についても正答率は高い一方で，識別力は十分に備えていたと判断される。

Ｃの問８は，改ざん内容を読み取り，その意図について思考させるという良問だと評価された。

第４問

第４問のＡでは，問１および問３は基本的な知識問題であるが，問２が，既習知識を実際の条文において具体化させる過程に思考が促される良問と評価された。全体的には標準的な難易度であった。

Ｂでは，問５についてやや細かい知識を問うているとの評価を得たが，文革期における中国の対米・対日外交の流れを問うことは当時の国際関係を考える上で重要であると考える。問４についてはヒントを与えすぎているとの評価を得たが，正答率の高さから鑑みるにそのとおりだったのかもしれない。

Ｃは，資料読み取りと知識を基に解答する組合せ問題である問７と問８は，良問という肯定的な評価と，単純な読み取りと知識事項を問う問題であるという対照的な評価の双方を受けた。

第５問

第５問のＡでは，問１は地域１に関する歴史的事象，問２は地域２とフランスとの歴史的関係について，いずれも基本的内容を問う標準問題との評価を得た。問３については，各地域がローマ帝国支配下に入った順に対して，正確な理解が求められる良問との評価を受けた。いずれも，正答率・識別力から判断すれば，標準的な出題内容であったと思われる。

Ｂでは，朱子学と陽明学の関係に関する問５について細かな知識を問う難問，朝鮮の近代史の流れを問うた問６について知識問題との評価を得た。問５・問６ともに正答率は低かった。問５は細かな知識を問うものではないが，正答を得るためには，二段階の思考，つまり朝鮮で重んじられたのが朱子学であること，朱子学を批判したのが王守仁（王陽明）であることを合わせて理解している必要があったため難易度が上がったと考えられる。識別力から見れば，標準的な出題内容であったと思われる。

４　ま　と　め

以上，問題作成部会として，各問の出題意図と，設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ，問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

作題に際しては，受験者の知的な興味を喚起するような資料やリード文・会話文を提示することに努めた。これについては，興味深い内容であり，受験者の歴史への興味関心を喚起するものが多いという評価を得た。また，「歴史とは過去の事実そのものではなく，資料によって構築された歴史事象であることを受験者に気付かせる，非常にメッセージ性の強いものとなった。こうした点は，歴史総合や探究科目を間近に控えた高校現場の教員にとって，熱烈に歓迎されるものであった」という評価を得たことは，今後の作題の励みになるであろう。

問いの対象となる資料については，グラフ，写真，文章資料など多様な歴史資料を提示することに努めた。これは，問題作成方針の基本的な考え方にある「資料やデータ等を基に考察する」ことを重視したためである。このため，従来のセンター試験に比べて，資料の読み取りに時間がかかる

ようになったが，実施結果によると，受験者にとってさほど大きな負担ではなかったことがうかがえる。

また，資料の読み取りと，習得した基礎的な知識を組合せることによって正答に至るような問いを作るように工夫した。一部には，単純な知識や年代を問うような設問が散見するが，その反面，世界史の知識がなくても資料の読解だけで解けてしまう問題が見られなくなり，より適切な出題がされたという評価を得た。また，単純な読み取り問題が多かったことで，難度が下がったという評価もあった。この点については，今回の結果に対する分析を深めたうえで，思考力・判断力・表現力等を問うような問いをさらに増やすことに努めたい。

問題作成方針には，資料を分析した上で「仮説を立てる」ことを受験者に求めることが含まれていた。複数の資料を提示するなどして，そこから適切な仮説や因果関係についての説明を選択させる問いの作成を試みた。ただ，授業の中で習得した知識によって，仮説や説明の適否が明確に判断できるような選択肢を用意することは簡単ではなく，年代が合致しない事柄や，明白な誤りを含む叙述を選択肢群の中から除外するという方法によって正答を見つけ出すような問いになってしまう傾向があった。寄せられた意見にある「仮説を複数個立て，資料をエビデンスとして用いながら検証するところまで，設問化される」ような問いを工夫することを，今後の課題としたい。

出題のバランスについては，近代以前が11問，近代以降が23問と，世界の一体化を境としてその後の時代についての設問が多かった。東アジアとヨーロッパについての問いが中心であり，受験者にとって取り組みやすかったことは，予想外に平均点が高かったことの一因であろう。文化史についての設問は６問あるが，単純に作品名や作者名を問うのではなく，時代背景やその歴史上の位置づけにかかわるような問いの作成を心がけた。

出題形式に関しては，グラフ・地図・年表の活用や，空欄補充とグラフの読み取りとを組合せる問いの作成を心がけた。初見の史資料の活用の技能を図る設問の工夫があったとの評価を得た。一方で，「単純読み取りの能力の判定は必要であるのか，必要であるならば，知識問題と読み取り技能の問題は堂々と別個に出題するべきではないのか」再検討を要するという意見があった。より高度な思考力・判断力・表現力等を問うという重い課題を与えられたわけである。